



祈り、祈り、祈り……。

ゆるしの秘跡を受ける人がずいぶん少なくなつた気がする。それでも、罪のベスト5は昔から決まっているようだ。「朝の祈りをお願いします。夕の祈りをお願いします。ミサに行

きませんでした……。」このあたりがベスト3……。特別に罪の糾明をしなくても、すらすらと出てくる罪のリスト……。あとはご想像にお任せします。

わたしのところに告白に来た方は、ただ罪を告白するだけではありません。ほとんどいつも質問される。失礼ですが、あなたができなかつた「朝の祈り」って、どんな祈りですか。「夕の祈り」ってどんな祈りですか。ミサには行かなかつたのですか、行けなかつたのですか。驚く人、戸惑う人、嫌な顔をする人、反応はさまざま。

全国どこでもそうではないと思うが、九州では、「朝の祈り」や「夕の祈り」はなんらかの「祈りの本」に載っている祈り

のことを指しているような気がする。とくに高齢の方は『公会祈祷文』の中に記されている祈りのことをいう。いづれにしても、非常に忙しい現代社会で祈りの時間をとり、ゆっくりと長い祈りをするのは難しくなっている。

そこで、祈りをする気持ちはあつても時間がないので、決められた、または自分で決めた祈りを始める前からあきらめてしまふ。どうしようか……と思う間に祈りはできないのに、決まつた祈りができないからと、あきらめてしまふのである。そうして、ゆるしの秘跡を受ける時「祈りをお願いします」となる。

でも、ほんとうに祈りはでき



山元 眞 神父

ないのだろうか。「朝の祈り」とは新しい命、新しい一日をいただいて感謝し、その一日が神の祝福で満たされるように祈る。命の与え主である神を賛美する。「神さま、ありがとうございます。今日も一日よろしくお願ひします……。」そのような気持ちで合掌するだけでも立派な朝の祈りだと思う。夕方、夜、床につく前に過ぎた一日を振り返り、神からいただいた恵みに感謝し、また明日も神の祝福の中で目覚めることができるように祈る。「神さま、今日も一日お守りくださいありがとうございます。ありがとうございました。どうぞお赦しく下さい。明日もよろしくお願ひします……。」このような気持ち

大切なのではないか。

仕事に疲れて祈る間がない。酒を飲んでしまつて、祈りをするのを忘れてしまふ……という声も聞く。そのような時は酒を飲む前に祈つたらどうだろう。

「神さま、今日もおかげさまで元気に酒を飲むことができます。ありがとうございます。ございます。」このような祈りの方が、決まった文言の祈りを習慣的に居眠りしながら唱えるよりは、よほどマシである。

黙想会などで、このようなことを話すと、きまつて「あの神父は祈りをしなくていいと言つた」という反響がある。そうではなくて、「こころ、気持ちが大切だ」と言っているつもりなのだが……。

祈りには「型」がある。その「型」は確かに祈るための助けとなるが、あまりに「型」ととらわれると習慣的になり、こころや気持ちに伴わないただの言葉……で終わってしまう。長い祈り？ であるミサも同様。二〇〇〇年にわたって行われてき



たミサは最高の祈りであり、洗練された祈りでもある。それだけに形骸化（けいがい）するおそれがある。その祈りの内容や福音のことは希薄になり、ただ参加すればそれでいい、という祈りになっているのではないだろうか。ミサに参加しさえすれば、信者の義務を果たしたことになる。それでいい……と考えている人がまだ多い気がする。そのような人にとっては、ミサの内容は問題ではない。だから……ミサの

時間は短いほどいいと思つたり、言つたりする。祈りは「神との対話」である。対話とは、双方が互いに語り合い、聞き合うこと。それができるためには、どうしても沈黙の時が必要となる。現代人のもつとも苦手とする沈黙。しかし、沈黙の時を作らなければ真の意味での祈りはできない。「朝の祈り」も「夕の祈り」も、ほんの少しの沈黙でもいい。沈黙の時を作れば祈りはできる。

三年ほど前のある日、一人の青年が提案した。「テゼの祈りの集いをこの教会でもしてみたい。他の教会で若者たちが集まり、テゼの祈りをして、とてもよかつたから」だそうだが、「よかつた」ということは、「祈れた」ということ。さっそく青年たちに声をかけ、土曜日の夜に集いを計画した。教会の門から聖堂の祭壇まで導くようにキヤンドルを灯し、聖堂内の照明を調整して祈りやすい雰囲気を作る。手の込んだことはしない。

祈りに導く沈黙が生かされるように場所を設定し、神のこぼれと歌と祈りが準備される。こうして準備が整えられ、テゼの祈りの集いが始まつた。みことばを聞いて、しばらく沈黙し、単純な歌とことばで祈るテゼの集いは、高齢者の方にも好評だった。

沈黙の世界に入るのは、そんなに気持ちのいいことではない。なぜなら、沈黙の世界に入ると自分や周りのことが見えてくるし、とくに自分の弱いところや社会や世界のまづいところが見えてくるから。しかし、もうしばらくの間、沈黙の中に身を置くと……その「暗い」世界の奥にやがて光が見えてくるようになる。自分も世界もすてたものではない。この自分の中に、この世界の中に、神は生きておられるということに気づかされる。それは、まことの平和を体験することでもある。

二十年前にテゼを訪れた時のあの平和の感触がよみがえってきた。何も言わない祈りが、ほんとうの祈りと思えてきた。